様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 4 月 23 日現在

機関番号：３２４１３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2007～2009
課題番号：19720114
研究課題名（和文）統語論・音韻論のインターフェイスに関する研究:語順を律する原理について
研究課題名（英文）

研究代表者 塩原佳世乃（SHIOBARA, KAYONO）
文京学院大学・外国語学部・准教授
研究者番号：30406558

研究成果の概要（和文）：本研究の目的とそのための研究内容は以下の 3 点に要約される。 1.依存詞並べ替えが、インターフェイス、特に音声形式(PF)制約と、統語的制約の両方を受けていることを、日英語以外の言語、特に音韻論的には英語に近く、統語論的には日本語に近いドイツ語やオランダ語で検証する。 2.語順を律すると考えられている統語的な原理(例えば主要部パラメター)が、インターフェイス制約からどの程度導かれるか、主に英語と日本語の資料や先 行研究をもとに分析し考察する。 3.1,2 の分析・考察結果が、言語機能の構造とその一般認知体系における位置付けの解明に貢献することを示す。 平成 21 年度は、関連分野の研究者との交流を続けながらこれまでの研究の成果をまとめ、平成 22 年 3 月に書籍 *Derivational Linearization at the Syntax-Prosody Interface* としてひつじ書房より刊行した。今後上記３について研究内容をさらに発展させるため、3 月には京都での生物言語学・進化言語学に関するワークショップを聴講した。

研究成果の概要（英文）：

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2007 年度 | 900 | 0 | 900 |
| 2008 年度 | 500 | 150 | 650 |
| 2009 年度 | 100 | 30 | 130 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 1500 | 180 | 1680 |

研究分野：英語学
科研費の分科・細目：
キーワード：生成文法理論、統語論、言語学、語順、音韻論

１．研究開始当初の背景

英語・日本語の並べ替えに関する文献は多いが、そのほとんどでは、文法内である語順が基本語順から随意的な規則によって派生されるということが暗黙の前提とされていた。よって議論の中心は、有標的な語順をいかに文法内の規則に違反しないように派生する

かという、理論内の技巧的な部分に置かれることとなった。これは先行研究が扱っている資料が、ほぼそれぞれの文を単独で提示した場合の母国語話者(しかも多くの場合は論文の著者自身)の文法性の判断にのみ基づいているという問題点を反映している。

２．研究の目的

本研究の目的とそのための研究内容は以下の３点に要約される。
１．依存詞並べ替え現象が、インターフェイス、特に音声形式（ＰＦ）制約と、文法内、特に主要部パラメターという統語的制約の両方を受けていることを、英語と日本語以外の言語、特に音韻上は英語に近い性質を持ち、主要部パラメター上は日本語に近いドイツ語やオランダ語等で検証する。
２．動詞・依存詞間語順を律すると考えられている原理、例えば主要部パラメターのような統語的制約が、インターフェイス制約から導かれる可能性があるかどうか、主に英語と日本語の資料や先行研究をもとに分析、考察する。
３．１－２の分析・考察結果が以下の２点において、言語機能の構造と、その一般認知体系における位置付けの解明に貢献することを示す。(i)語順を律する原理がＰＦインターフェイス制約を反映していることを示した上で、極小主義でそれぞれ独立したレベルであると見なされているＰＦ・ＬＦ間の関係を見直し、特にＬＦがどこまでＰＦ制約に、さらにはより一般的な時間軸に沿った動的な文処理に関する原理に還元されるかを追求する。(ii)言語機能内での統語構造の構築が、文処理の仕組みの直接的な影響を受けていること、特に構造が文処理上の韻律単位をもとに、左から右へと作られていくという仮説がなす予測を、依存詞の並べ替え現象と動詞・依存詞間語順の統語上の特徴に関して検証する。

３．研究の方法

本研究ではまず先行研究が扱っている資料の信憑性を見直し、文の容認可能性を判断してもらう際に、その文を適当な文脈に埋め込むことをした。英語と日本語の二言語の研究から始めたのは、それらの資料が量的にも質的にも得やすいということと、それぞれが主要部先行型・後続型言語の代表的言語であるために比較が明確になるという利点があることが主な理由である。英語と日本語以外に研究対象としたドイツ語・オランダ語に関しては既に豊富な先行研究が存在するので、まずはそこで言われていることと本研究での主張との整合性の検証から始めた。

理論上は、既に統語面から動機付けられて提案されている multiple spell-out の操作は、従来の下から上(bottom-up)でなく、左から右への統語構造構築と組み合わせて行われるという主張をした。

左から右への派生は、時間軸に沿って行われる文処理の仕組みを反映しているという点で、言語運用面からの動機付けを担っていると言えるが、これは極小主義の「言語機能の内容がどれだけ一般認知体系の要請から導かれるか」を探るという研究上の方策にかなうものであった。

４．研究成果

平成 21 年度は、関連分野の研究者との交流を続けながらこれまでの研究の成果をまとめ、平成 22 年 3 月に書籍 *Derivational Linearization at the Syntax-Prosody Interface* としてひつじ書房より刊行した。今後上記３について研究内容をさらに発展させるため、3 月には京都での生物言語学・進化言語学に関するワークショップを聴講した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1 件）

<u>Shiobara, Kayono</u>. “A Performance Based Approach to Multiple Dependencies,” 文京学院大学外国語学部・文京学院短期大学紀要第９号 *(Journal of Bunkyo Gakuin University Department of Foreign Languages and Bunkyo Gakuin College NO.9)*, pp.57-70. 2010 年 2 月（査読有）

〔学会発表〕（計　0 件）

〔図書〕（計　1 件）

<u>Shiobara, Kayono</u>. *Derivational Linearization at the Syntax-ProsodyInterface.* ひつじ書房. 2010 年 3 月（単著）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計◇件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
（　　）

研究者番号：

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：